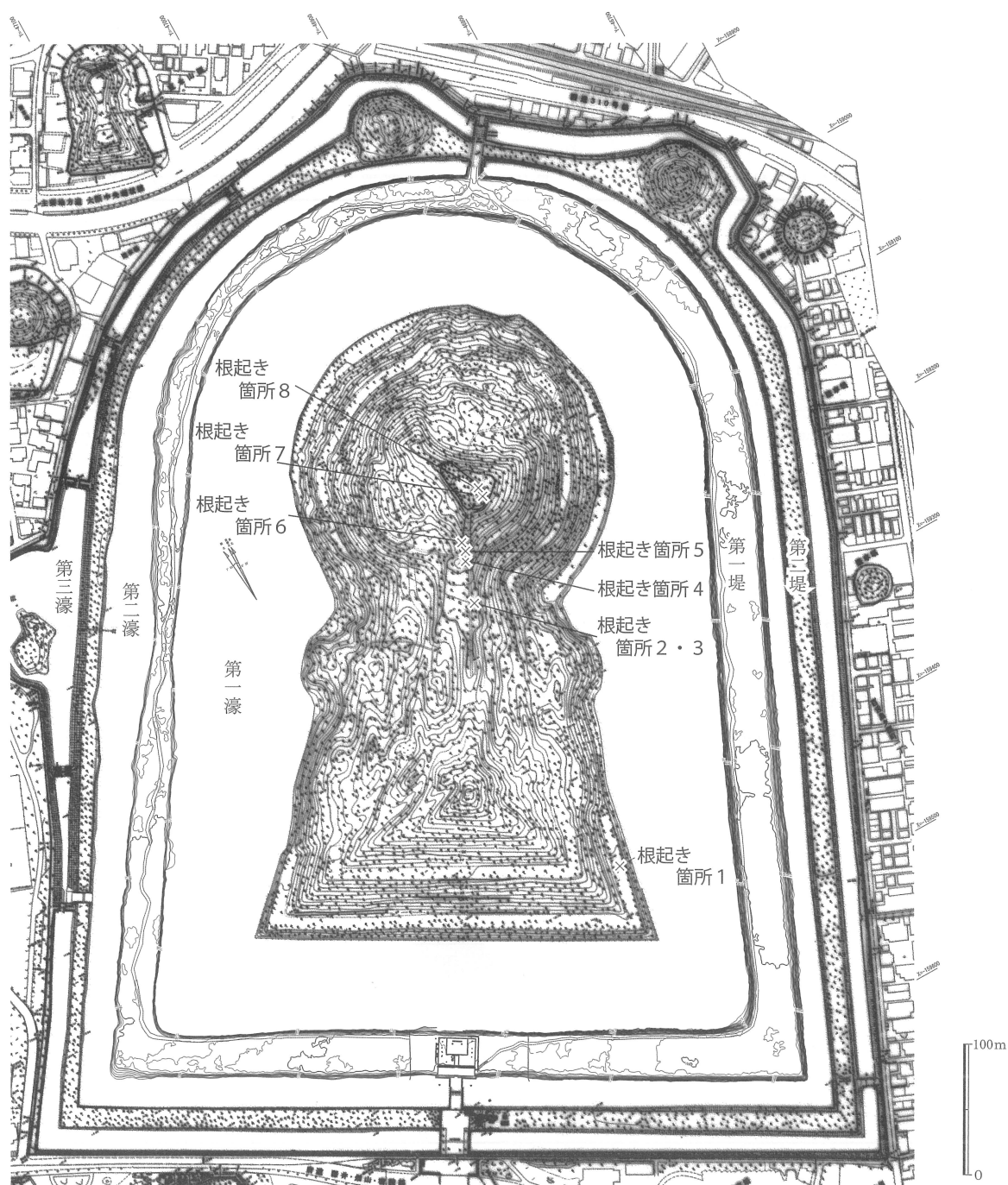


仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵倒木復旧工事に伴う調査

はじめに

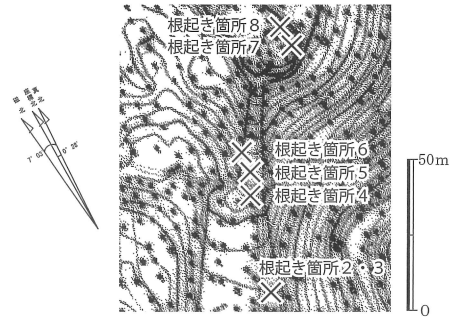
仁徳天皇百舌鳥耳原中陵は、大阪府堺市堺区大仙町に所在する前方後円墳である。当陵では平成30年9月に上陸した台風21号によって、複数箇所倒木が発生した。木全体が倒れ、根ごと起き上がってしまったものも多くみられ、それにより埴輪が露出した状態の場所も確認された。そのため、倒木の伐採などの復旧工事の実施前に、これらの埴輪を回収し、根起き箇所の土層断面を精査して状況を確認する調査をおこなった。調査は加藤一郎、土屋隆史が担当し、濱田武典、角野陽香がこれを補助した。調査期間は、令和元年



第23図 百舌鳥耳原中陵 調査箇所位置図 (1/5,000)

10月2日～8日である。調査の実施にあたっては堺市文化観光局文化財課の土井和幸氏、十河良和氏、相馬勇介氏からご指導を賜った。

なお、今回の報告で使用する座標は、ITRF（国際地球基準座標系）にもとづいた世界測地系の平面直角座標第Ⅵ系をもちいており、図面において使用している方位記号の方角は基本的に座標北である。また、高さの基準には東京湾平均海面（T.P.）をもちいた。（土屋隆史）



第24図 百舌鳥耳原中陵 調査箇所位置図（墳頂部隆起斜道）（1/2,500）

1. 調査箇所と出土遺物の概要

調査することとなった根起き箇所は計8箇所、その位置は前方部第1段平坦面東南側（根起き箇所1）、前方部墳頂（根起き箇所2、3）、墳頂部隆起斜道上面（根起き箇所4～6）、後円部墳頂（根起き箇所7、8）におおきく分けられる（第23、24図）。

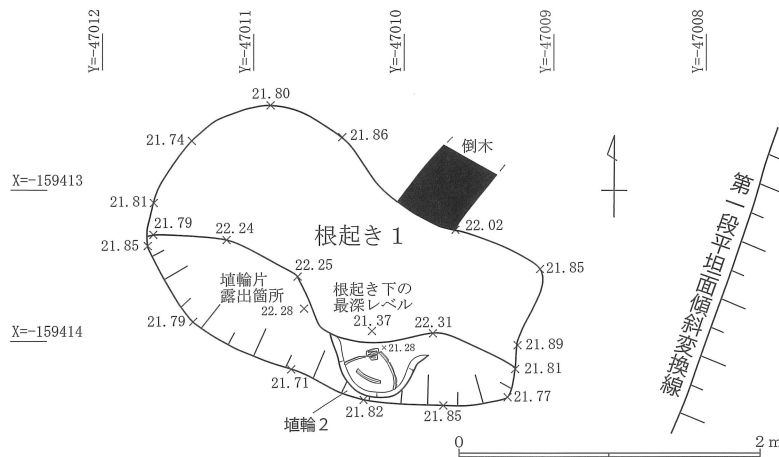
今回の調査における出土遺物は、1,595点であった。そのほとんどが墳丘平坦面にめぐらされた埴輪列を構成していたと考えられる埴輪の破片であった。具体的な埴輪の器種としては、埴輪列を構成していた円筒埴輪・朝顔形埴輪（円筒埴輪類）と、円筒埴輪の上に載せていたと考えられる蓋形埴輪を確認できた。それ以外の出土遺物としては、近世段階の土師器片や磁器片を後円部墳頂の根起き箇所7、8において数点確認したのみである。

今回確認された埴輪はすべて窖窯焼成によるもので、いずれの資料にも黒斑はみられない。円筒埴輪類は胴部の直径が35～40cm前後となるものを主体とする。口縁部の形状は直立するものが多く、口縁部高は突帯間隔よりも若干狭くなる傾向にある。突帯間隔はおおよそ10.5～12cm程度であり、10.5cmとなるものが多いようである。第1段高は10～12cm程度である。外面2次調整は、同一個体内においても製作工程を反映するため、すべての段で同一とはならないので注意が必要であるが、基本的にはBc種ヨコハケに分類できるものが多い。透孔は円形であり、1段に二つ穿たれる。確実にわかる範囲では、円筒埴輪で第3、5段に透孔がある。なお、今回の調査で確認された円筒埴輪類に、これまで当陵で確認されている傾向から大きく逸脱するようなものは含まれない⁽¹⁾。

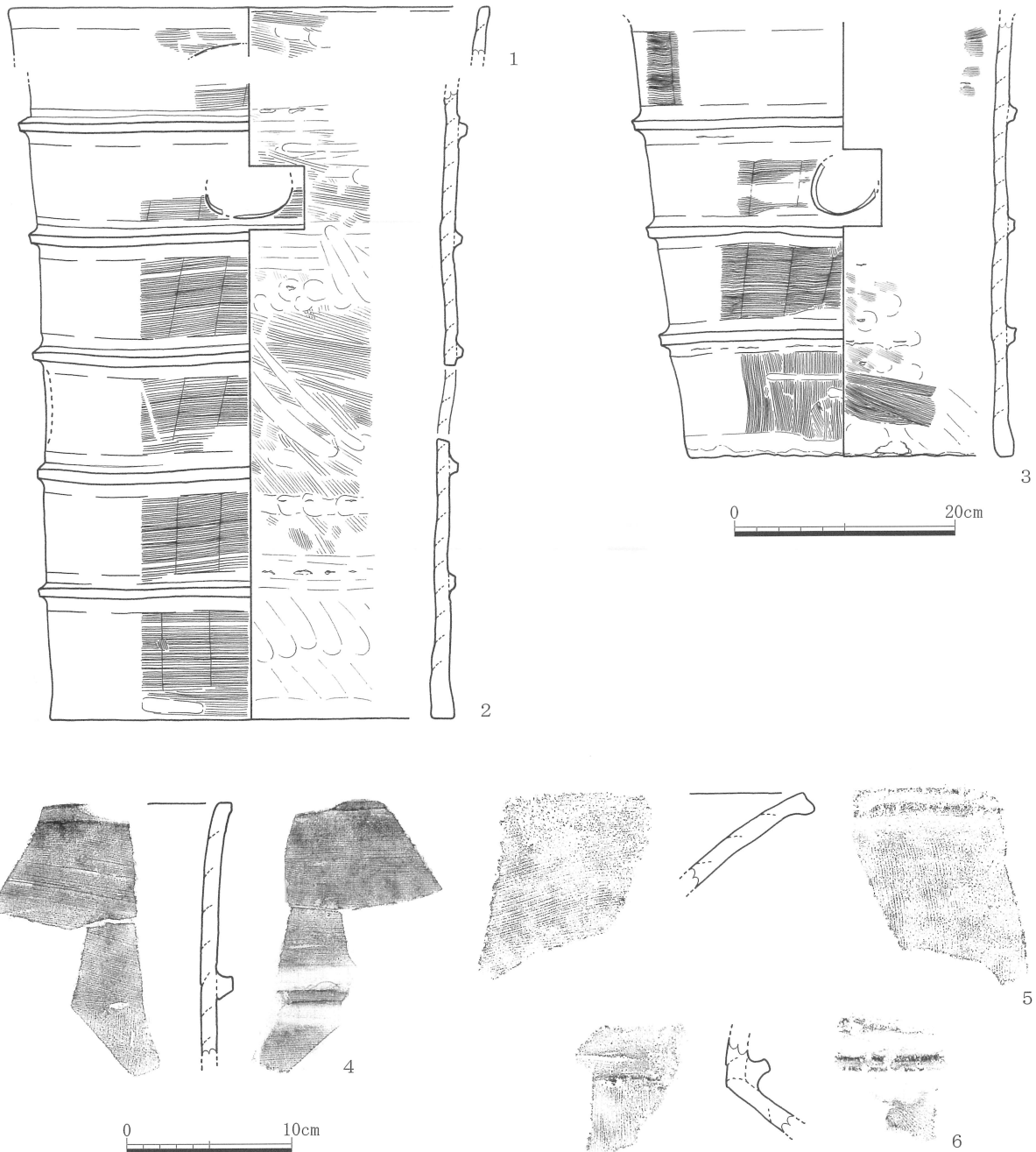
以下では、それぞれの根起き箇所ごとに根起きの状況と出土遺物を紹介していくこととする。なお、直径を復元した遺物は縮尺1/6、それ以外のは縮尺1/4で図示した。（加藤一郎）

（1）前方部第1段平坦面東南側（根起き箇所1）

墳丘の状況（第25図、図版15-1～4） 根起き箇所1は前方部東南側第1段平坦面にあり、第1段平坦

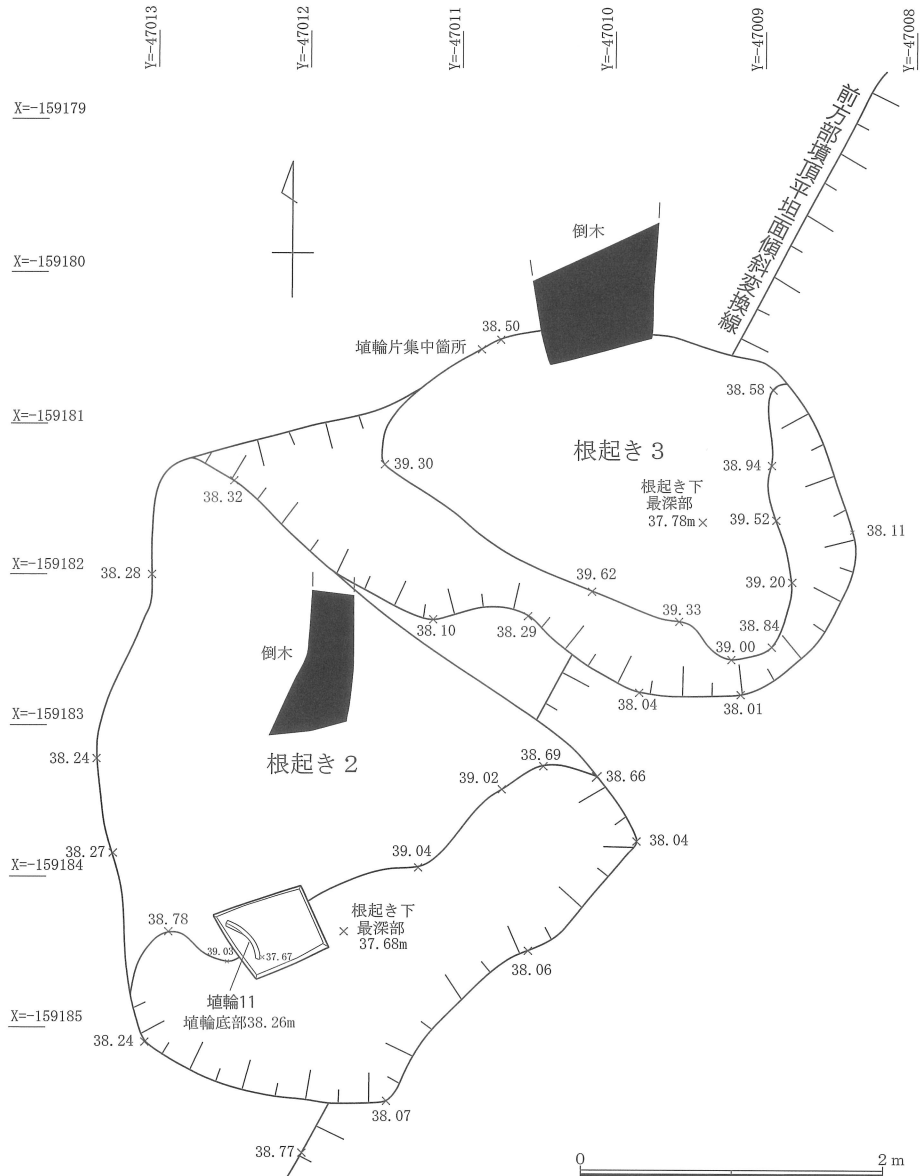


第25図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所1平面図（1/50）



第26図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所1 出土品実測図 (1/4、1/6)

面から第1段斜面へと下る傾斜変換点の近くに位置する。木が北東の濠側に倒れ、第1段平坦面に根起きが生じた。根起き箇所の大きさは、東西長2.6m、南北長2.0mであり、深さ0.4mである。精査の結果、上から表土、流土（木の根による攪乱）、古墳時代の盛土であった。調査箇所が全て根起き箇所であるという性質上、いずれの箇所においても木の根による攪乱が著しく、築造後における土層の形成過程を把握することは難しい。しかし、基本的には厚さ約15cmの表土直下が古墳時代の盛土になっているものと思われる。また、根起き箇所南側からは原位置の可能性のある円筒埴輪を1個体分を確認した（第26図1、2）。円筒埴輪は、第1段平坦面が第1段斜面へと下る傾斜変換点から、2.0mほど第2段斜面寄りに設置されていた。埴輪設置レベルは標高21.3mである。これらは前方部東側1段目平坦面をめぐる埴輪列の1つであろう。（土屋）
 出土遺物（第26図、図版17-1～3） 1、2はハケメが共通することから同一個体と思われる。この個



第 27 図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所 2・3 平面図 (1/50)

体は、調査区において原位置で確認されたもので、前方部側面の墳丘第 1 段テラス上の埴輪列を構成していたと考えられる。最上段にはヘラ記号の一部とみられる線刻を確認できる。ヨコハケは第 1、4、5 段と第 2、3、6 段でそれぞれハケメパターンの天地が逆になっており、ハケ原体を頻繁に持ち替えていたことをうかがわせる（積み上げ単位や突帯貼付のタイミングとの関係は不明）。突帯の上辺には、突帯設定に伴う L 字痕がみられ、透孔は現状で第 3、5 段にみられる。3 は 1・2 の個体よりも一つ北側に設置されていたと考えられる個体である。4 の口縁部高は約 10.5cm である。5、6 は朝顔形埴輪の破片である。（加藤）

(2) 前方部墳頂東側（根起き箇所 2、3）

墳丘の状況（第 27 図、図版 15-5～6、16-7） 根起き箇所 2、3 は前方部墳頂東側にあり、前方部墳頂平坦面が第 3 段斜面へと下る傾斜変換点の近くに位置する。根起き箇所 2、3 は隣接しており、いずれも木が北側に倒れ、前方部墳頂平坦面に根起きが生じた。

根起き箇所 2 の大きさは、東西長 3.6 m、南北長 4.3 m、深さ 0.4 m である。上から表土、流土（木の根による攪乱）、古墳時代の盛土であった。根起き箇所西側からは、原位置の可能性のある円筒埴輪を 1 個体分

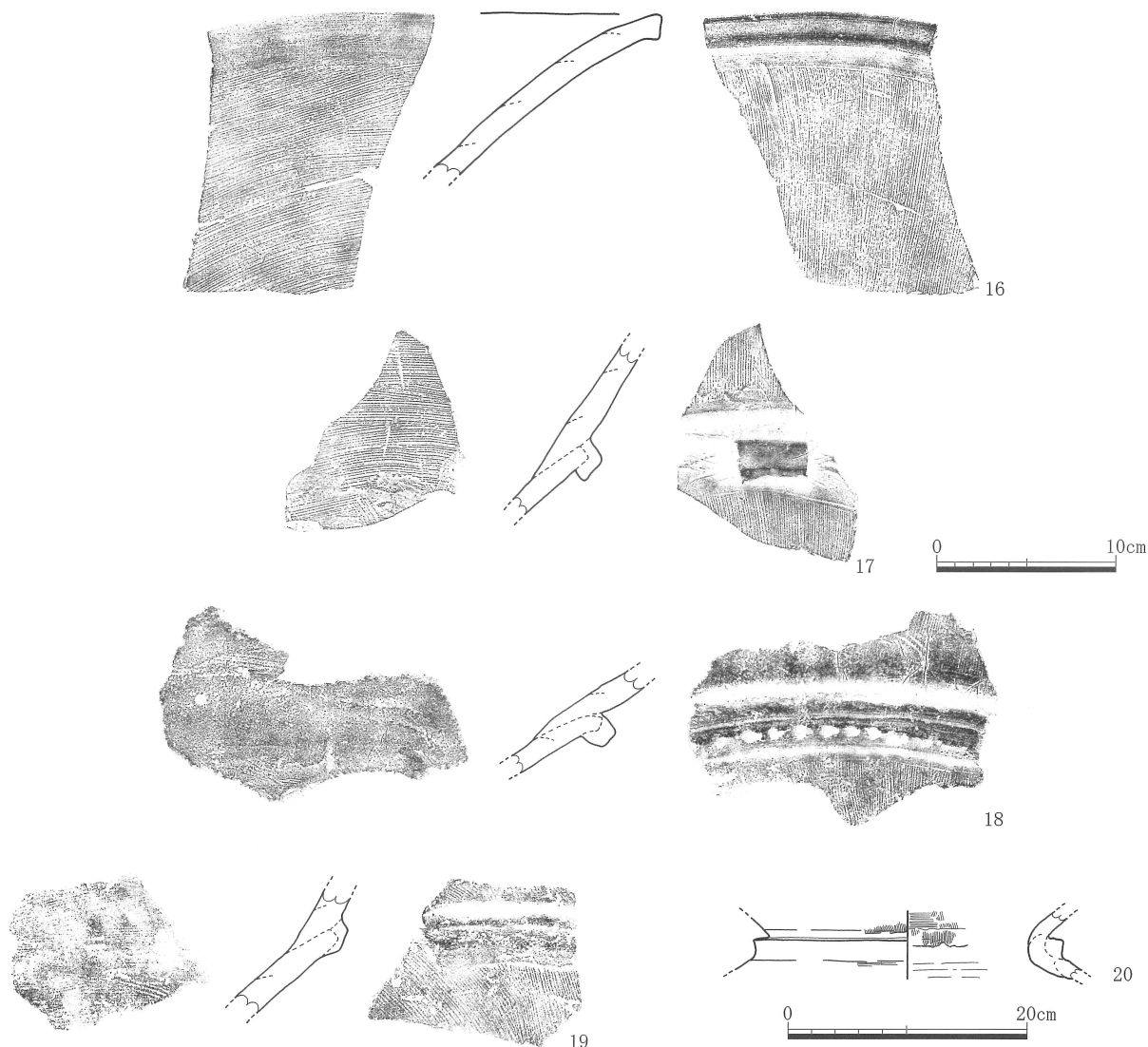


第 28 図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所 2 出土品実測図 (1) (1/4、1/6)

を確認した (第 28 図 11)。円筒埴輪は前方部墳頂平坦面から第 3 段斜面へと下る傾斜変換点から 1.0 m ほど西寄りに設置されていた。埴輪設置レベルは標高 38.26 m である。前方部墳頂をめぐる埴輪列の 1 つであろう。

根起き箇所 3 の大きさは、東西長 4.4 m、南北長 2.4 m、深さ 0.3 m である。上から表土、流土 (木の根による攪乱)、古墳時代の盛土であった。根起き箇所西側からは、埴輪片が集中して出土した。なお、原位置の埴輪列は確認できなかったが、第 30 図 23 のように円筒埴輪の底部片も出土していることから、この根起き箇所付近に埴輪列が並んでいたものと考えられる。(土屋)

根起き箇所 2 出土遺物 (第 28、29 図、図版 17-4 ~ 6、18-1 ~ 2) 7 は口縁部の破片で、口径が約 51cm、口縁部高が約 11cm である。8 も口縁部の破片であるが、口縁端部付近の外面に突帯設定でみられるのと同様の凹線が観察できる。9 は調査時に「完周個体」として取り上げたもので、突帯間隔は約 11cm である。10 は第 1 ~ 3 段にかけての破片と推測するが、下段の割れ具合から判断して底部打ち欠きであった

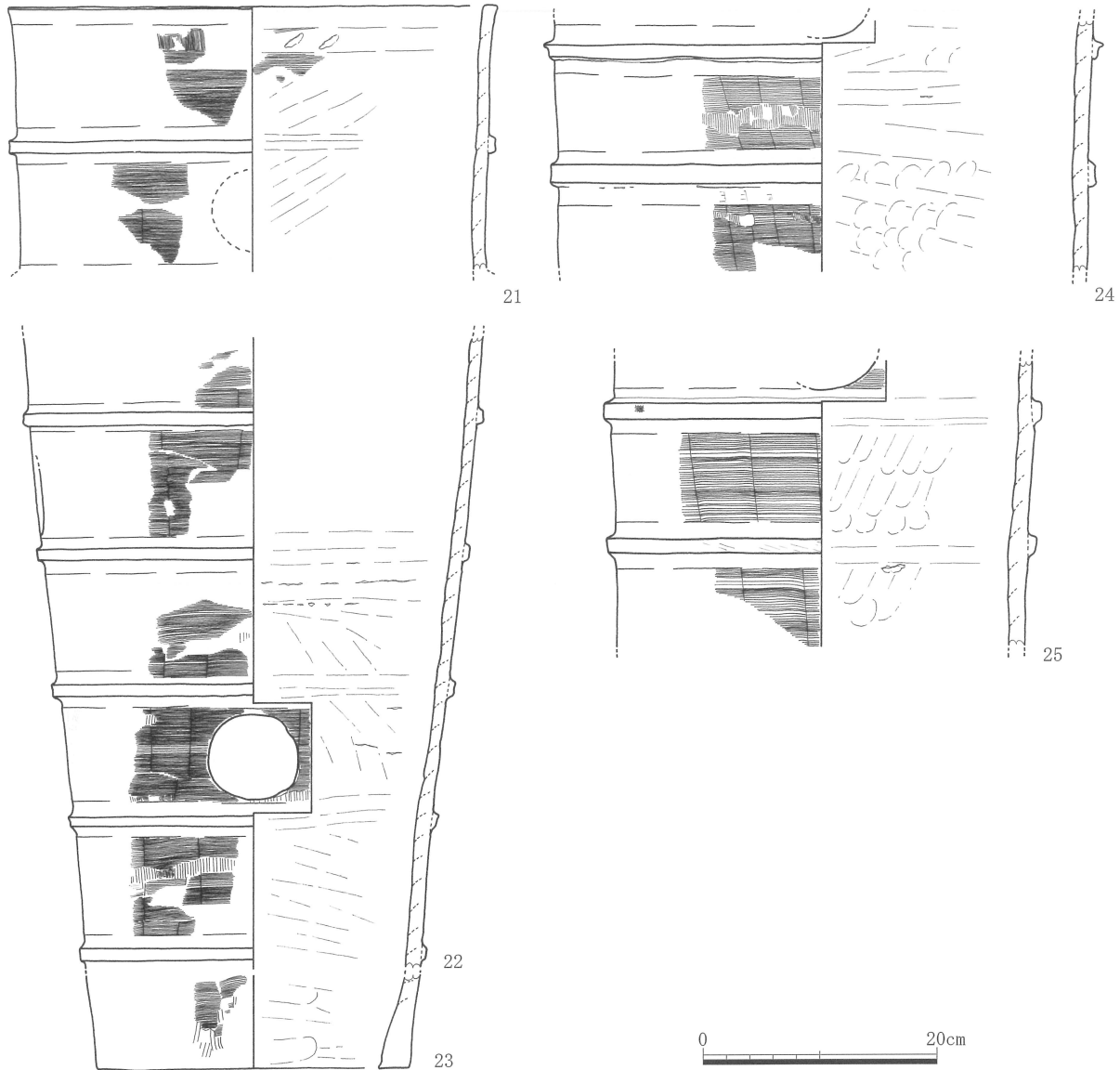


第29図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所2 出土品実測図(2) (1/4、1/6)

可能性も考えられる。この個体では突帯設定に二重凹線をもちいていることが観察できる。11は調査時に「原位置」として取り上げたもので、底径約30cm、第1段高約12cmである。第2段の外面調整はB d種ヨコハケに該当しよう。12～14はハケの凹凸がほとんどみられない外面調整をもつ点で共通しており、同一個体と考えられる。15は円筒埴輪類ではなく、蓋形埴輪の基部と考えられる。前方部墳頂平坦面の埴輪列では、頻度は不明だが円筒埴輪の上に蓋形埴輪が載せられていたと推測される。

16～20はいずれも朝顔形埴輪の破片である。同一部位で比較すると17、18、19は別個体であり、付近に3個体以上は朝顔形埴輪が存在していたことがうかがえる。このことから、埴輪列における朝顔形埴輪の頻度はかなり高かったと推測される。16、17はハケメが共通することから同一個体と考えられる。17～19をみてもあきらかなように、朝顔形埴輪の1～2次口縁にかかる部分の成形方法には製作者の個性が反映されやすいようである。

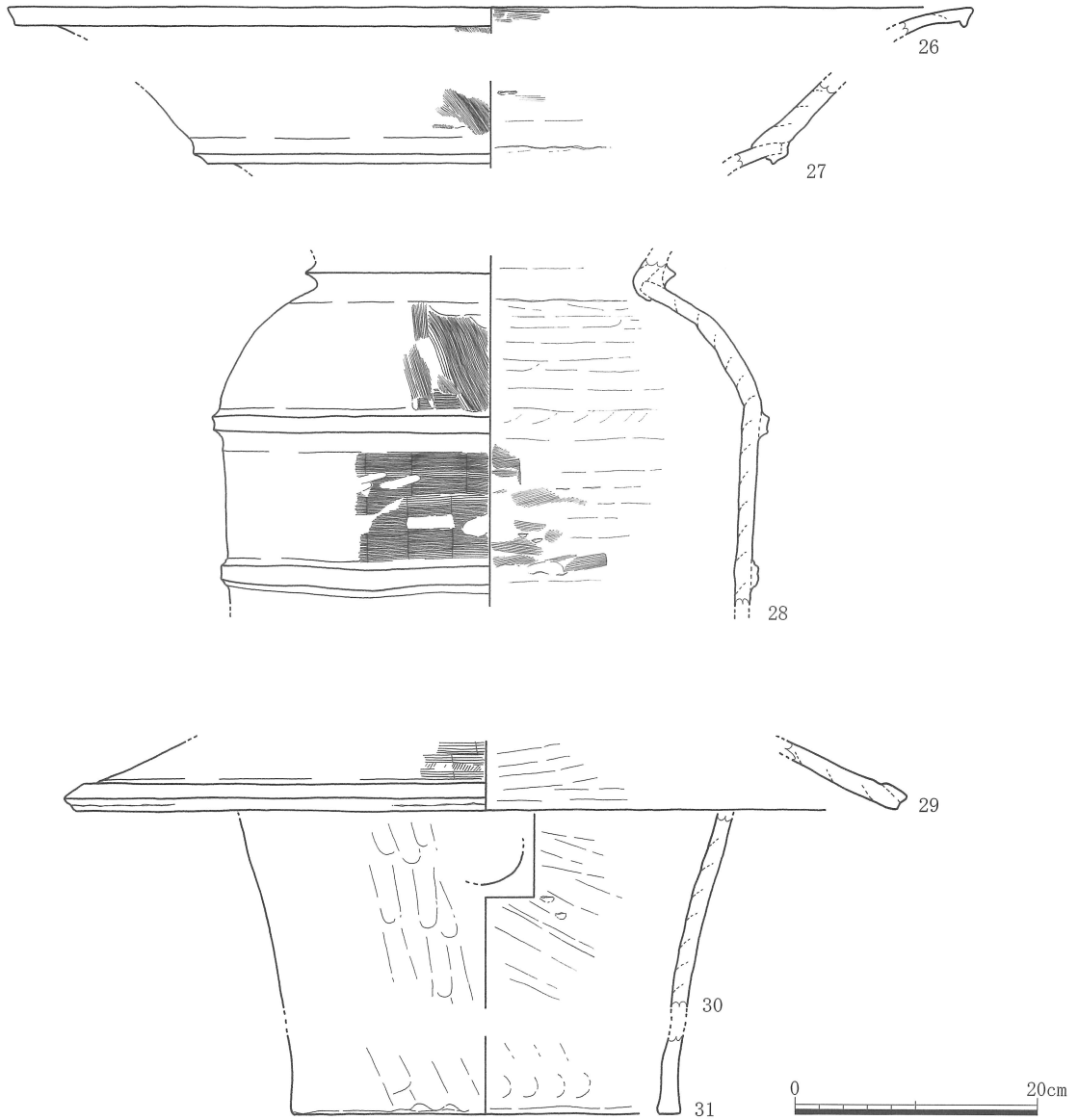
根起き箇所3出土遺物(第30、31図、図版18-3～7、19-1～2) 21～23は外面2次調整のハケメが共通することから、同一個体と考えられる。ただし、第1～4段で確認できる外面1次調整のタテハケが、外面2次調整のヨコハケとはパターンが異なる粗いハケメであることは注意される。なお、外面2次調整はB b種ヨコハケとなっている。復元ではあるが、口径は約42cm、口縁部高、突帯間隔、第1段高はほぼ同



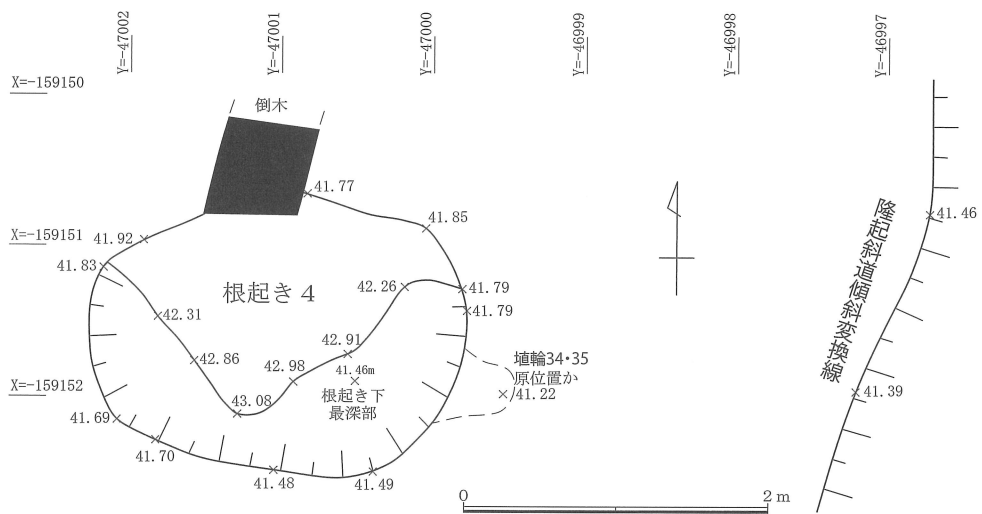
第30図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所3 出土品実測図(1)(1/6)

一で約11.5cm、底径は約27cmである。透孔は第3、5段に確認できることから、第7段にも透孔があったと推測し、第8段が口縁部とすれば、図のように器高約90cmで7条8段構成の円筒埴輪に復元可能である。なお、21～23の外面2次調整のハケメは、26～28の個体のハケメと共通する。24は突帯間隔が約10.5cmで、下の突帯が上の突帯と形状が異なることを根拠にすれば第1～3段の破片と推測される。25は下の突帯上に板押圧の痕跡が観察できることから、この突帯が第1条突帯となり、第1～3段にかけての破片と推測される。なお、第2条突帯上には布の圧痕もみられる。突帯の調整時に使用したものであろうか。

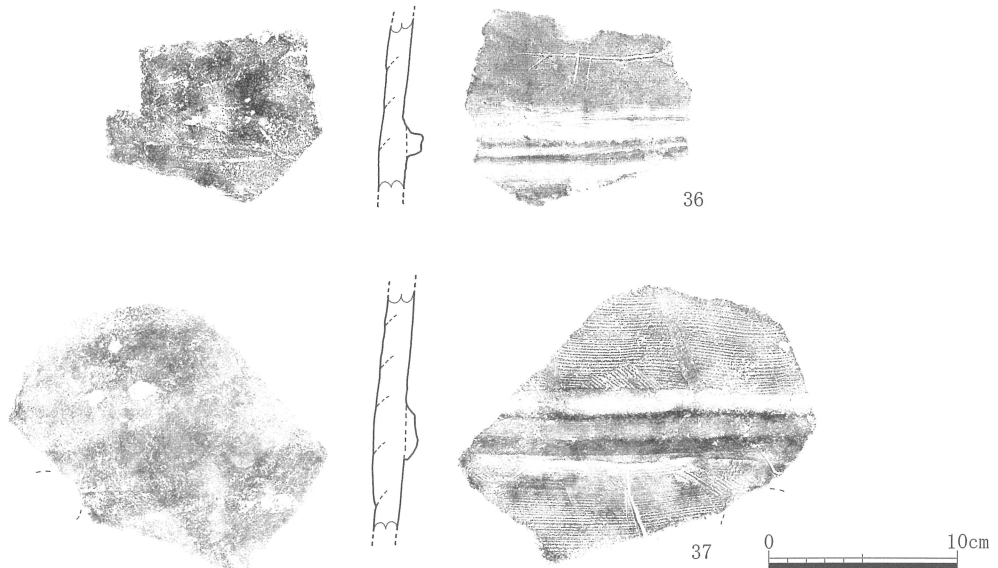
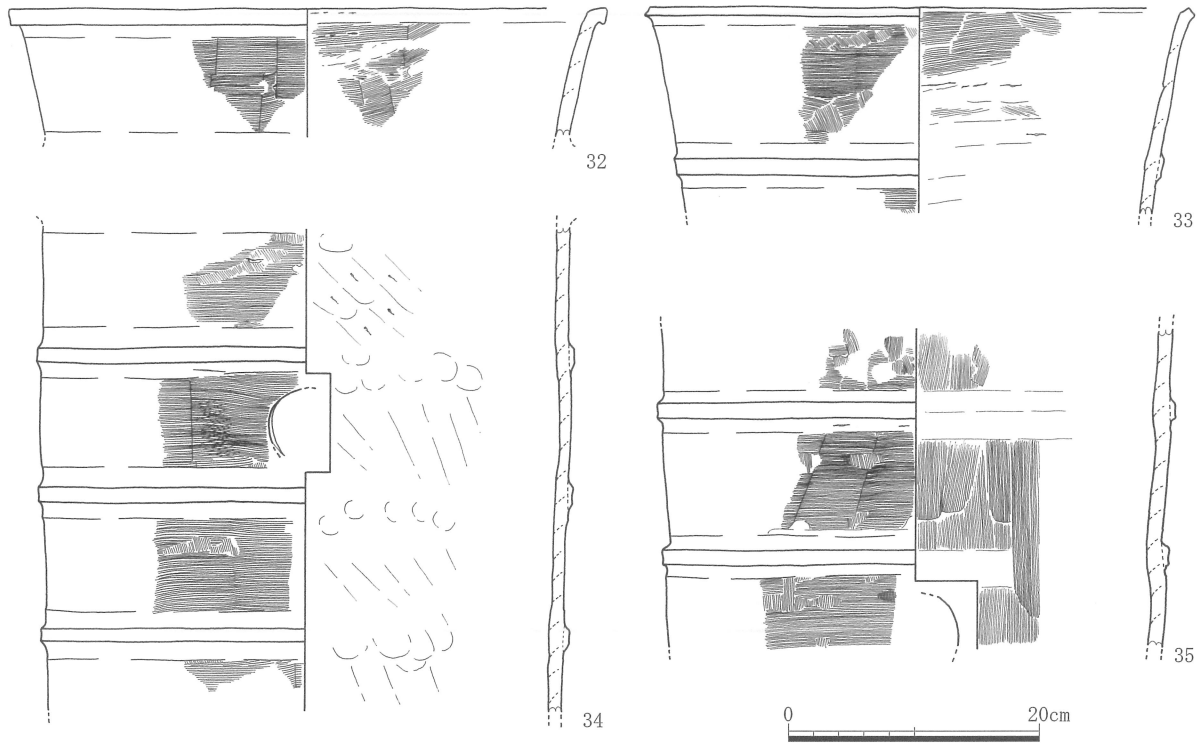
26～28はハケメが共通することから朝顔形埴輪の同一個体片であると推測される。口径は約80cm、胴部の直径は約43cm、突帯間隔は約12cmである。なお、この個体のハケメは21～23の外面2次調整のハケメと共通する。29～31は同一個体であるかは不明なもの、いずれも蓋形埴輪の破片である。根起き箇所2においても推測されたことであるが、やはり前方部墳頂平坦面の埴輪列には頻度は不明なもの蓋形埴輪が載せられていたと考えられる。(加藤)



第31図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所3 出土品実測図(2)(1/6)



第32図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所4 平面図(1/50)



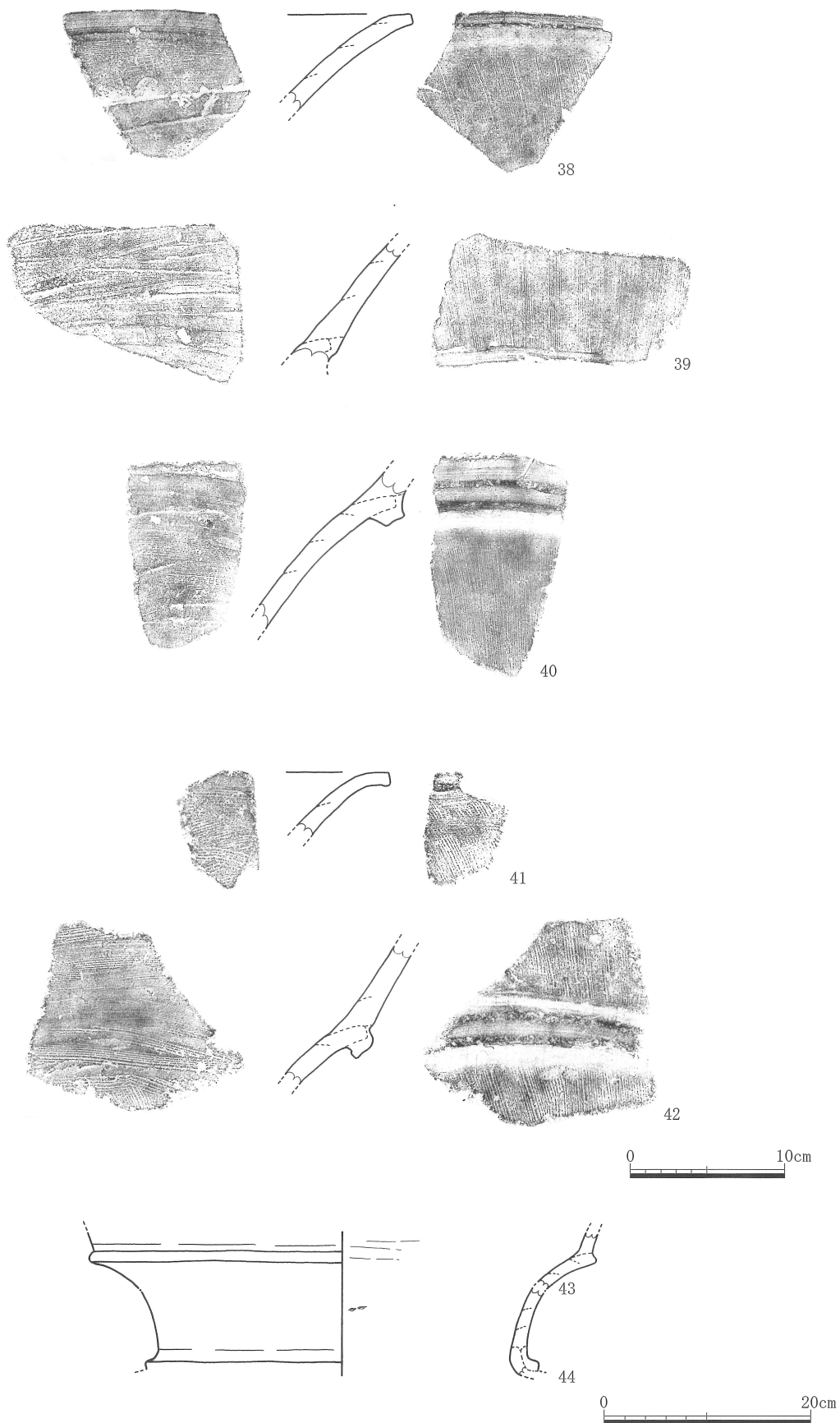
第33図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所4 出土品実測図(1) (1/4、1/6)

(3) 墳頂部隆起斜道上面(根起き箇所4、5、6)

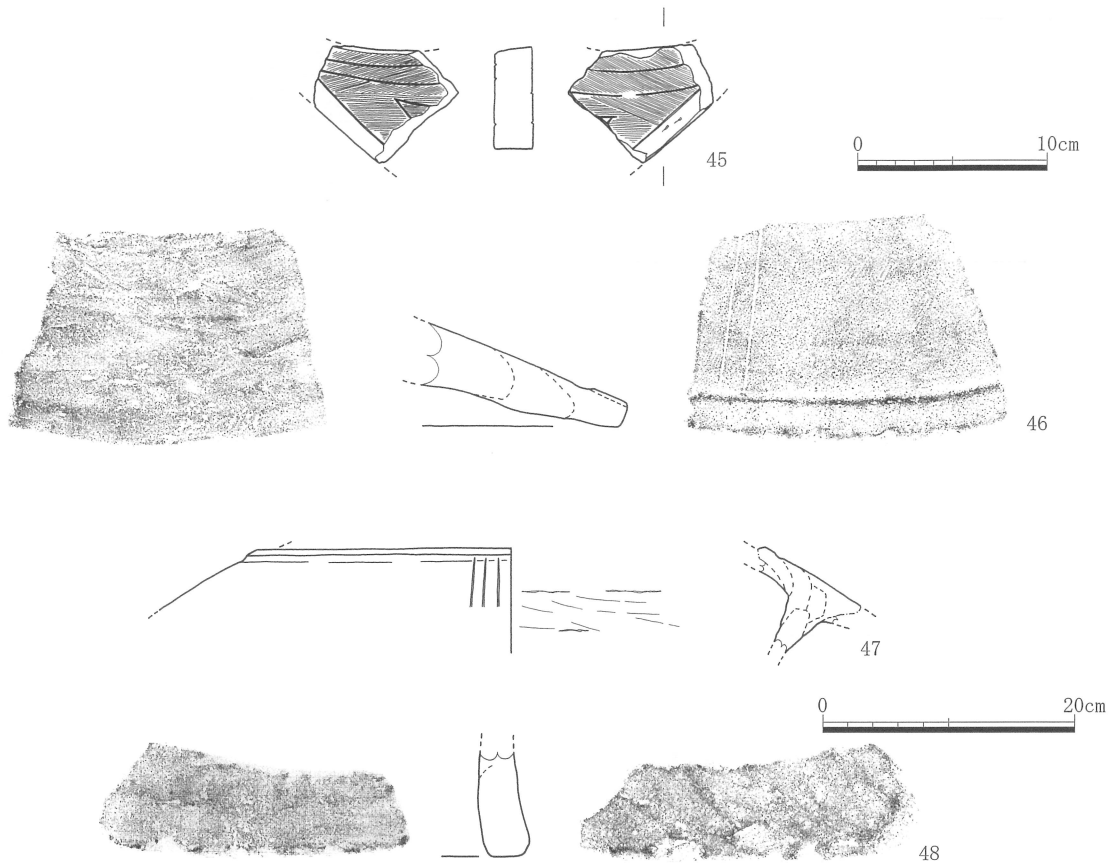
墳丘の状況(第32、36、38図、図版15-7~8、16-1~3) 根起き箇所4、5、6は墳頂部隆起斜道上面にあり、隆起斜道東側の上面から第3段斜面へと下る傾斜変換点の近くに位置する。いずれも木が北側に倒れ、隆起斜道東側に根起きが生じた。

根起き箇所4の大きさは、東西長2.5m、南北長1.9m、深さ0.3mである。上から厚さ約15cmの表土、流土(木の根による攪乱)、古墳時代の盛土であった。根起き箇所外の東側からは、原位置の可能性がある円筒埴輪片が出土した(第33図34、35)。円筒埴輪は、隆起斜道上面から第3段斜面へと下る傾斜変換点から2.2mほど西寄りに設置されていた。

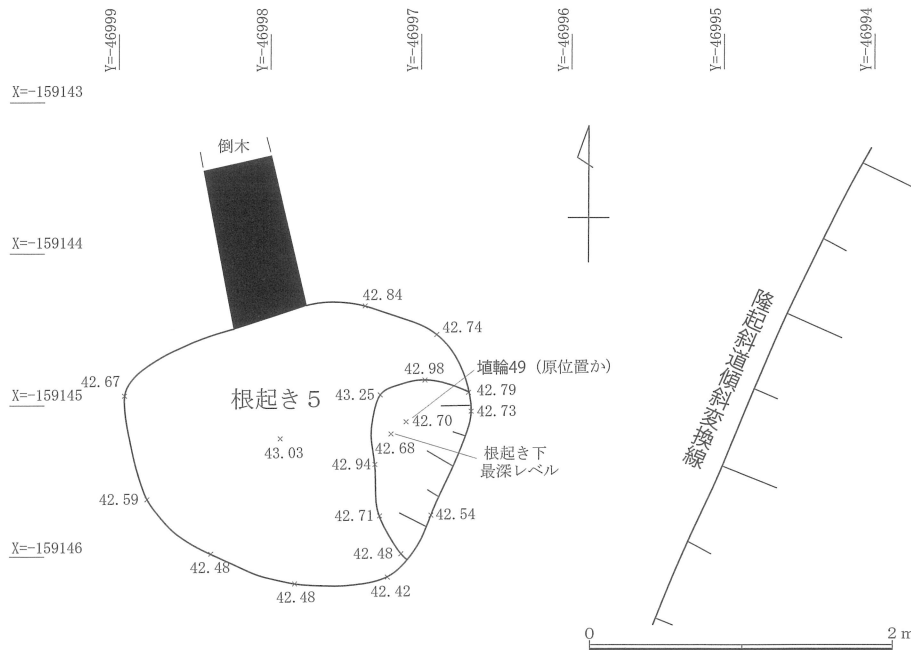
根起き箇所5の大きさは、東西長2.3m、南北長1.9m、深さ0.1mである。上から表土、流土(木の根に



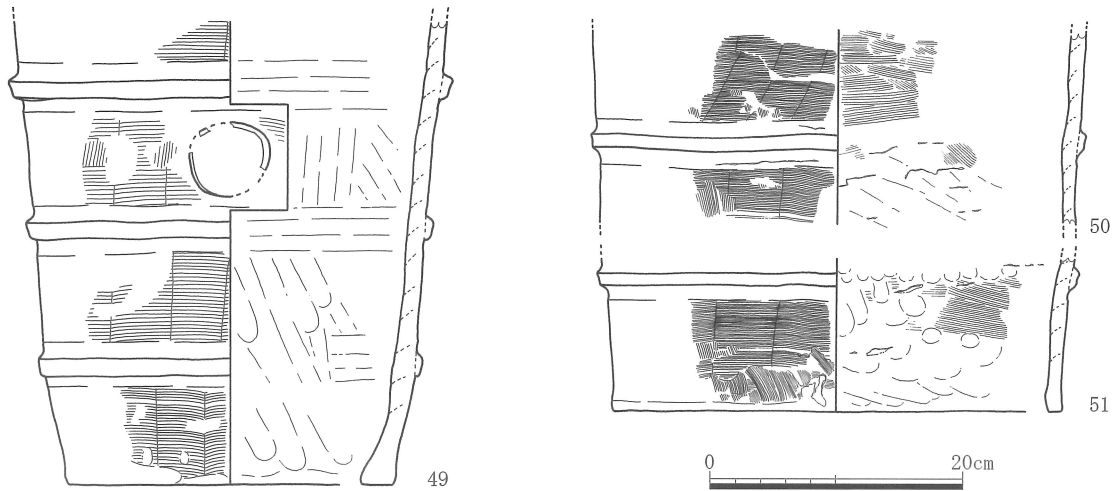
第 34 図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所 4 出土品実測図 (2) (1/4、1/6)



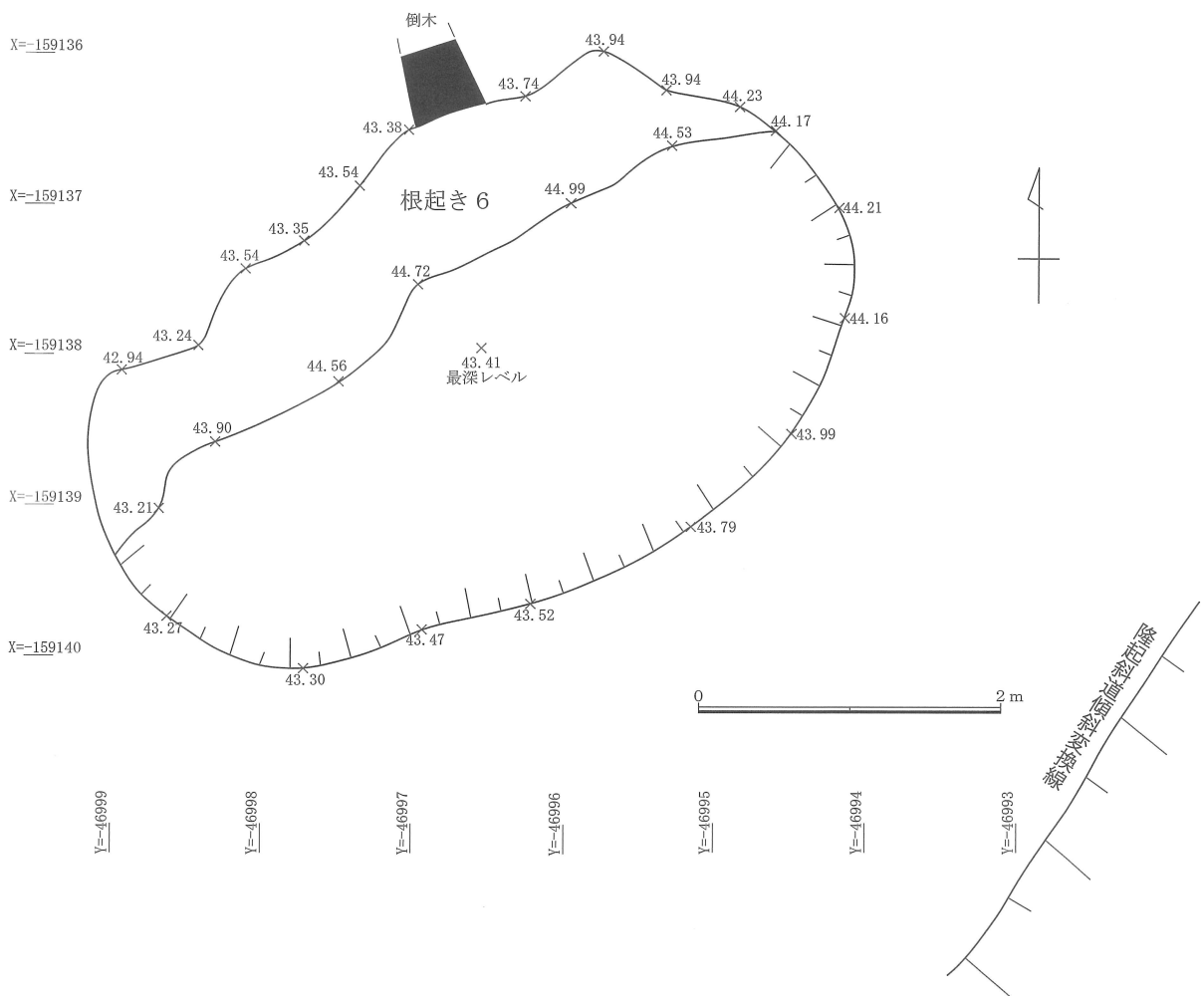
第35図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所4 出土品実測図(3) (1/4、1/6)



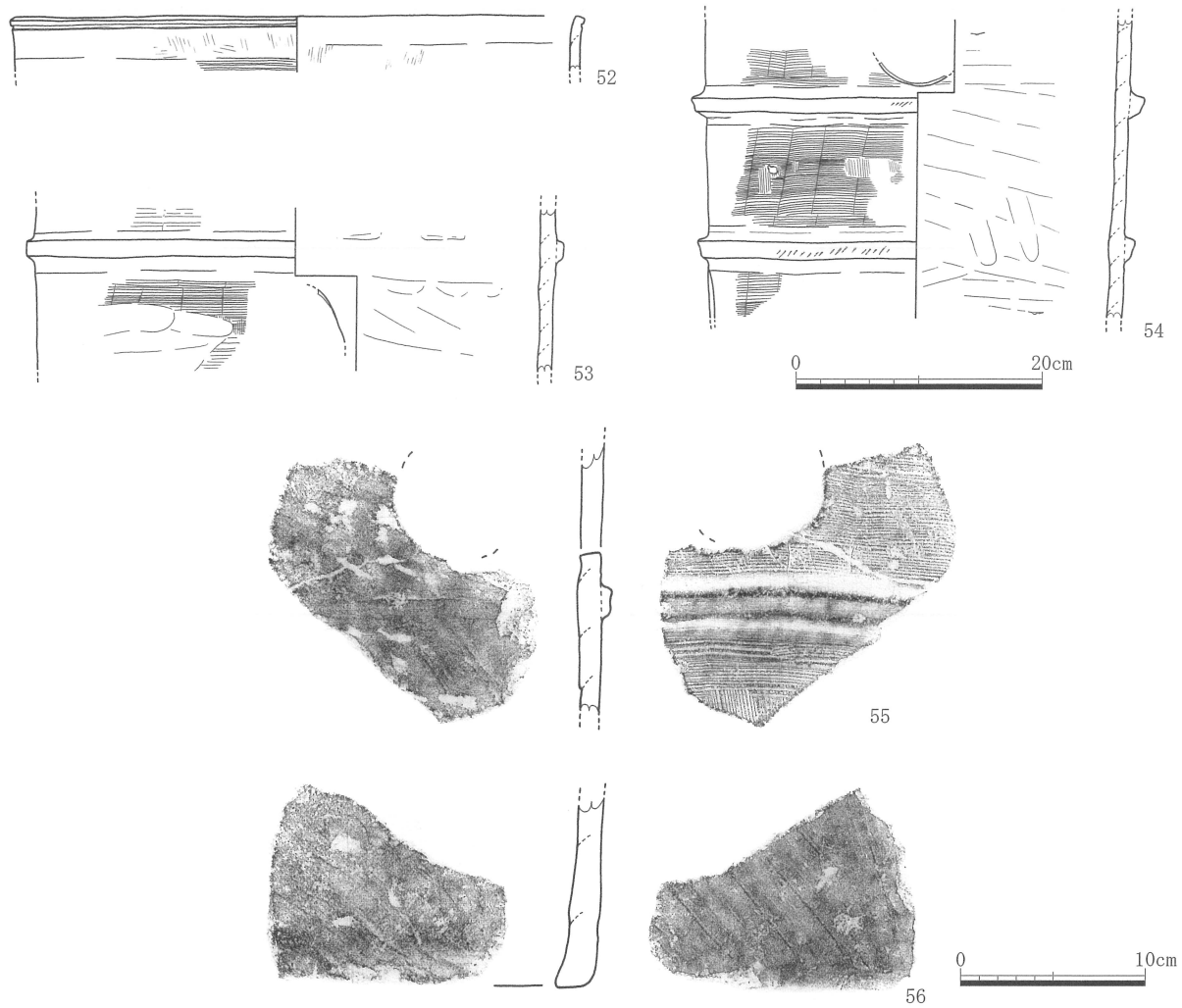
第36図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所5 平面図 (1/50)



第 37 図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所 5 出土品実測図 (1/6)



第 38 図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所 6 平面図 (1/50)



第39図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所6 出土品実測図(1) (1/4、1/6)

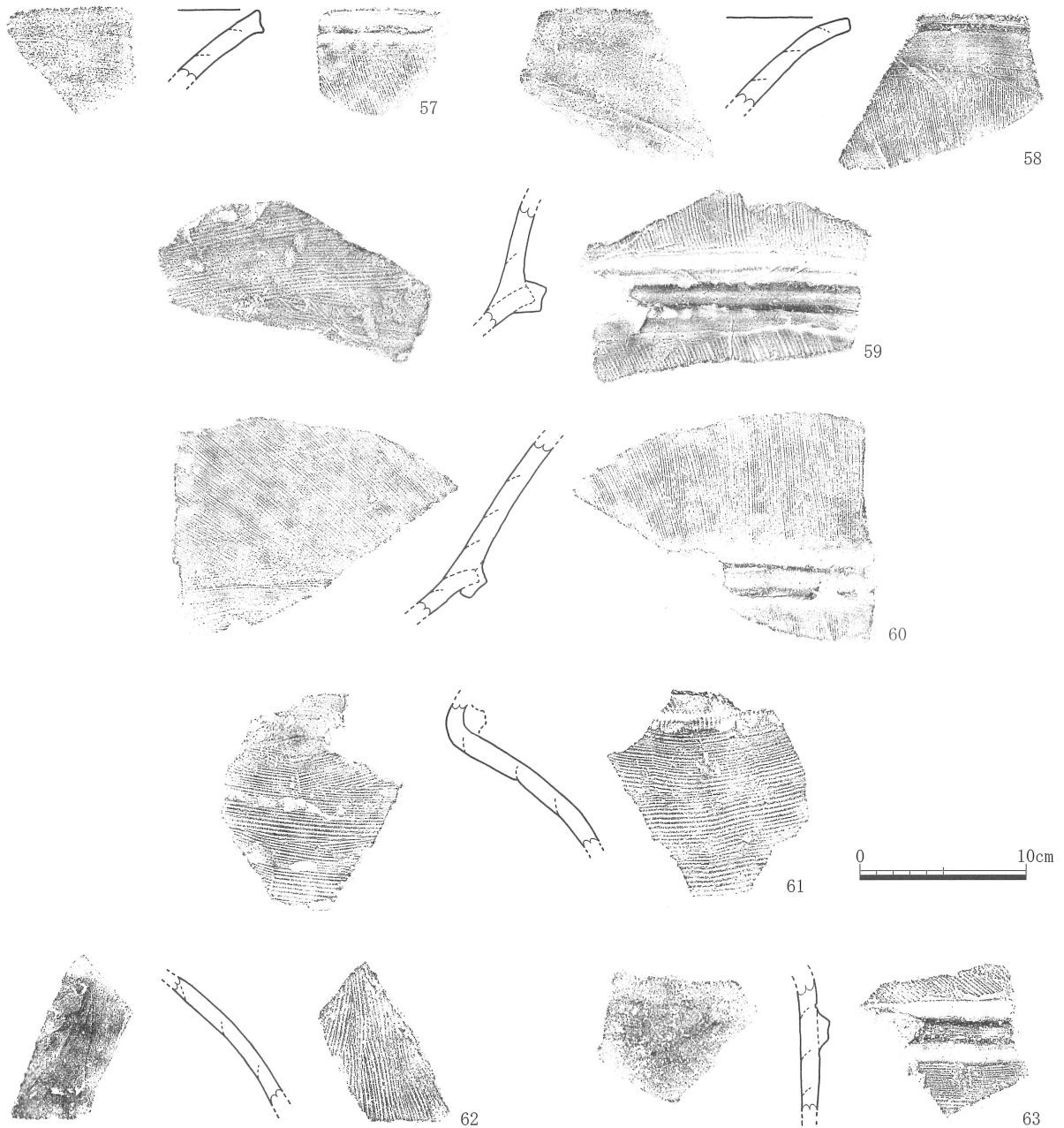
よる攪乱)、古墳時代の盛土であった。根起き箇所中央付近からは、原位置の可能性がある埴輪片が出土した(第37図49)。円筒埴輪は隆起斜道上面から第3段斜面へと下る傾斜変換点から2.0mほど西寄りに設置されていた。埴輪設置レベルは標高42.7mである。

根起き箇所6の大きさは、東西長5.0m、南北長4.1m、深さ0.8mである。上から表土、流土(木の根による攪乱)、古墳時代の盛土であった。原位置の可能性がある埴輪片は確認できなかった。(土屋)

根起き箇所4出土遺物(第33～35図、図版19-3～8) 32～37は円筒埴輪の破片である。32、33は口縁部を含む。32の口径は約48cm、33の口径は約43cm、口縁部高は約12cmである。34～37は胴部の破片である。34は直径が約42cm、突帯間隔が約12cmである。内面の上部では指によるナデではなく、ケズリにもみえるような板ナデをほどこしている。35は直径が約40cm、突帯間隔が約12cmである。36は外面に線刻がみられる。馬あるいは鹿といった四足動物を描いたものであろうか。この調査箇所出土した円筒埴輪には突帯が扁平となるものが多い。

38～43は朝顔形埴輪の破片である。38～40、41～42、43～44はそれぞれ同一個体の破片と考えられる。44では肩部から頸部の成形方法が変則的であることを観察できる。

45～48は蓋形埴輪の破片である。根起き箇所2や3と同様に、やはり前方部墳頂平坦面の埴輪列には頻度は不明なもの蓋形埴輪が載せられていたと考えられる。45は立飾部の破片である。46、47は笠部の破片であり、笠部内を区画する3本一組の線刻がほどこされている。48は基部の破片である。

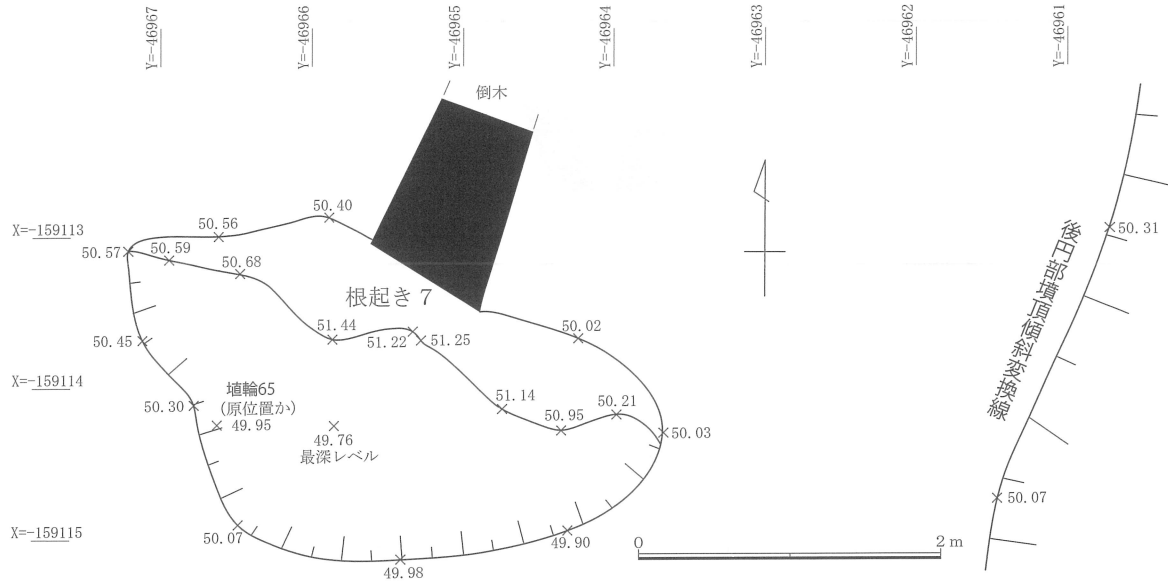


第40図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所6 出土品実測図(2)(1/4)

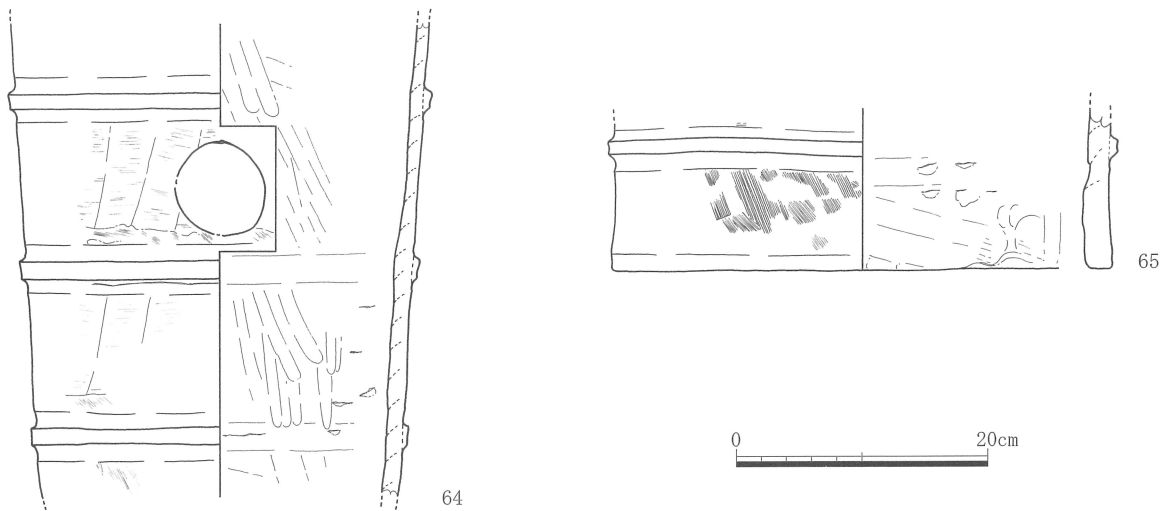
根起き箇所5出土遺物(第37図、図版20) 49は底径が約26cm、第1段高が約10cm、突帯間隔が約11cmである。第1条突帯が他の突帯にくらべてやや扁平となっていることから、板押圧がなされていた可能性があるものの、明瞭な痕跡は確認することができない。50・51は同一個体の破片で、底径が約36cm、第1段高が約11cmである。図では50が第2～3段となるように図示されているが、内面のナデとハケの状況から判断すれば、50は第1～2段の破片と推測される。

根起き箇所6出土遺物(第39、40図、図版21) 52～55は円筒埴輪の破片である。52は口縁部の破片で、口縁端部付近の外面に凹線がみられる。54は直径が約34cm、突帯間隔が約11.5cmである。突帯圧着時の板目痕あるいはタタキ痕のような痕跡が突帯上にみられることが注意される。56は円筒埴輪の底部である可能性もあるが、外面調整がナデのみであることから判断して蓋形埴輪の基部の可能性が高いと考える。

57～63は朝顔形埴輪の破片である。口縁端部や1～2次口縁部といった同一部位で個体数を推測するか



第41図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所7平面図 (1/50)



第42図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所7 出土品実測図 (1/6)

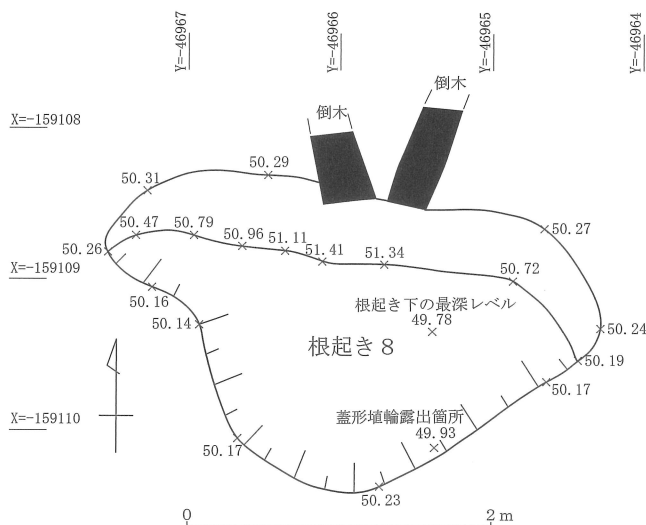
ざり、この調査箇所朝顔形埴輪が2個体以上は存在していたと考えられる。なお、62・63はハケメが共通することから同一個体であろう。(加藤)

(4) 後円部墳頂(根起き箇所7、8)

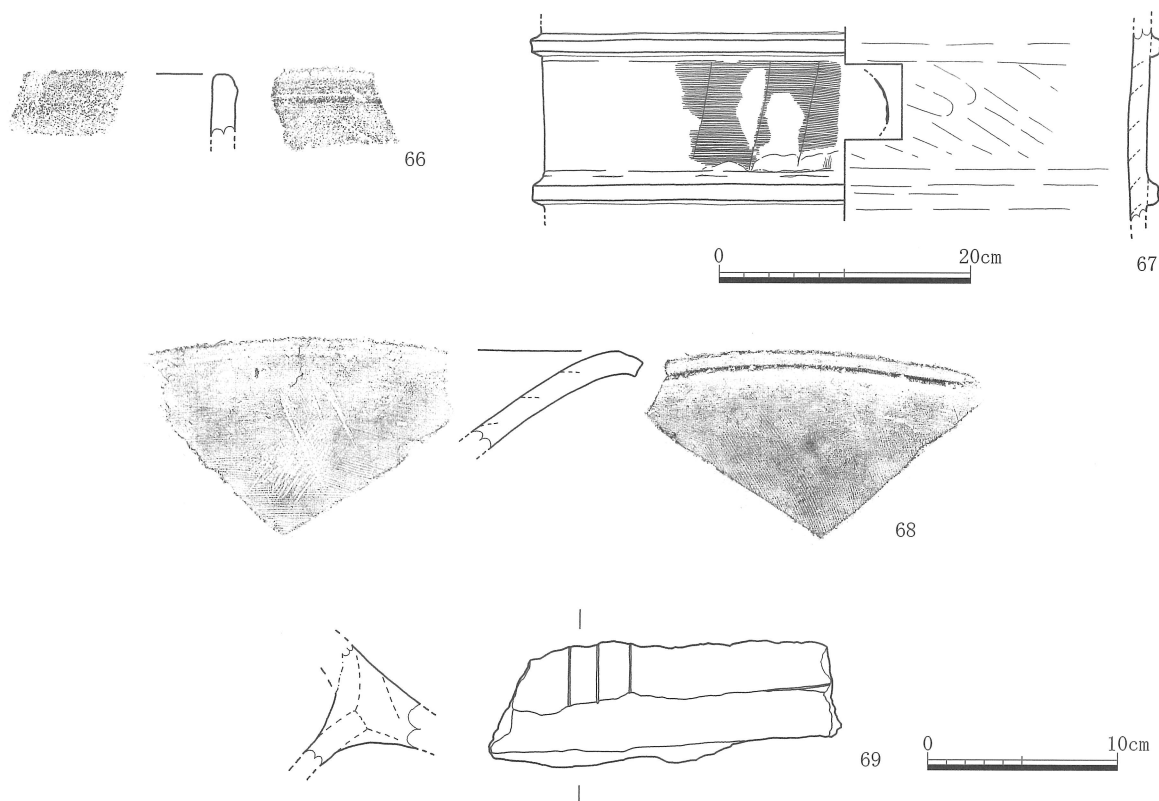
墳丘の状況(第41、43図、図版16-4~6、8) 根起き箇所7、8は後円部墳頂東側に位置する。いずれも木が北側に倒れ、後円部墳頂に根起きが生じた。

根起き箇所7の大きさは、東西長3.6m、南北長2.3m、深さ0.5mである。上から厚さ約15cmの表土、厚さ約20cmの流土(木の根による攪乱)、古墳時代の盛土であった。根起き箇所西側からは、原位置の可能性がある円筒埴輪を1個体分確認した(第42図65)。円筒埴輪は墳頂平坦面から第3段斜面へと下る傾斜変換点から5.1mほど西寄りに設置されていた。埴輪設置レベルは標高49.95mである。

根起き箇所8の大きさは、東西長3.3m、南北長2.1m、深さ0.4mである。上から厚さ約0.1mの表土、厚さ約0.3mの流土(木の根による攪乱)、古墳時代の盛土であった。原位置の可能性がある埴輪片は確認できなかった。(土屋)



第43図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所8平面図 (1/50)



第44図 百舌鳥耳原中陵 根起き箇所8 出土品実測図 (1/4、1/6)

根起き箇所7出土遺物(第42図、図版22-1~2) いずれも円筒埴輪の破片である。64は一番下の突帯が他の突帯にくらべて扁平になっていることから、板押圧がなされたままの状態と推測される。このことから64は第1~4段の破片と考えられる。外面調整のハケメは、条線がとても密で凹凸もほとんどないため、板ナデのようにもみえる。65は底径が約40cm、第1段高が約10.5cmである。なお、根起き箇所7では近世段階のものと思われる磁器片が1点確認されている(図版22-2の70)。

根起き箇所8出土遺物(第44図、図版22-2) 66は円筒埴輪の口縁部の破片である。67は円筒埴輪の胴部の破片である。直径が約48cmと大きく、突帯間隔は約11.5cmである。突帯の上辺には突帯設定の痕跡と考えられるL字痕がみられる。68は朝顔形埴輪の口縁部片である。69は蓋形埴輪の笠部片である。笠部

内を区画する 3 本一組の線刻がみられる。なお、根起き箇所 8 では近世段階のものと思われる土師器片 4 点（うち 3 点は接合）が確認されている（図版 22-2 の 71）。

2. 調査の成果

(1) 遺物

今回の調査によって、当陵の墳丘部における埴輪の様相をしることができた。具体的にいえば、すでにしられている資料もあわせて考えると、当陵の墳丘部における円筒埴輪は 7 条 8 段構成で、第 3、5、7 段に円形の透孔を二つもつと推測される。また、前方部墳頂平坦面の埴輪列には高い頻度で朝顔形埴輪が使用されており（3～4 本に 1 本程度の割合か）、それよりも頻度はさがるが蓋形埴輪も円筒埴輪の上に載せられていたことがうかがえる。また、わずかではあるが後円部墳頂では近世段階の遺物も確認することができた。当陵の後円部には近世段階に堺奉行所の勤番所がもうけられていたという指摘もあり⁽²⁾、それを裏づける痕跡といえよう。（加藤）

(2) 円筒埴輪列

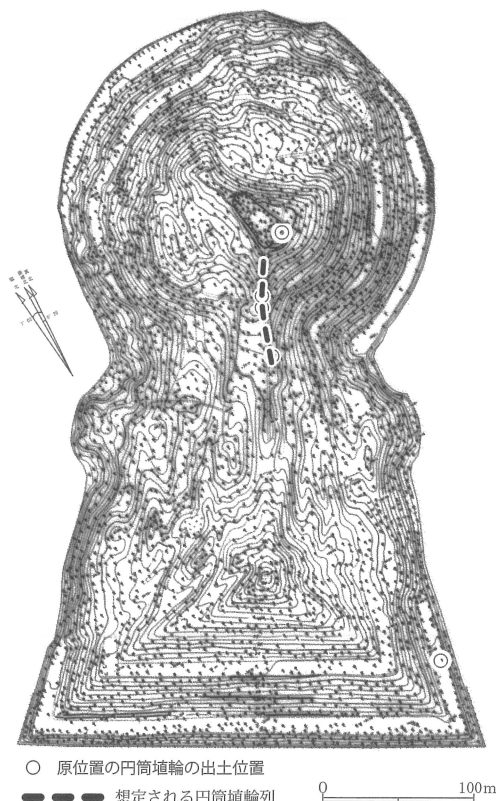
今回の調査において、根起き箇所 1、2、4、5、7 において、原位置の可能性が高い円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪は、墳丘平坦面から斜面に下る傾斜変換点の近く（傾斜変換点から墳丘側へ約 2 m 入ったところ）に設置されていたものと推測されるため、円筒埴輪列の並びから、墳丘構造をある程度知ることができる。当陵は後世の崩落によって当初の墳丘形態が推測しにくいいため、これは墳丘構造を知るうえで有益な情報となる。

第 45 図では原位置の円筒埴輪の出土位置を○で示した。根起き箇所 1（前方部第 1 段平坦面東南部）では原位置の円筒埴輪が出土した。平成 6 年度から 9 年度にかけて当陵で実施された墳丘外形調査では、前方部正面と東西側面では斜面の等高線が均一であり、この部分にのみ後世の石列がみられることが報告されている⁽³⁾。前方部正面と東西側面は後世に手を加えられた可能性が高いが、根起き箇所 1 では築造時の状況が維持されていたものと考えられる。

また、根起き箇所 2（前方部墳頂）と根起き箇所 4、5（墳頂部隆起斜道）の円筒埴輪の位置を結んだ線は、前方部墳頂から隆起斜道にかけての東側の築造時の状況を反映しているだろう。また、西側については情報を得ることができなかったが、隆起斜道西側の傾斜変換点は現状よりも西側にあった可能性が高いと考えられる。（土屋）

まとめ

今回の調査では台風による倒木の根起き箇所の状況を調査し、露出した遺物を取り上げて記録化した。当陵は後世の崩落や修補によって築造時の墳丘構造を把握することが難しくなっているが、今回の調査で原位置の円筒埴輪を確認できたことによって、墳頂部隆起斜道の一部（東側）と前方部第 1 段平坦面東南側が築造時の状況を保っていることを知ることができた。今回の調査成果が、今後の研究で活用されていくことを期待したい。なお、調査後には予定どおり倒木の伐採や処理を実施した。（加藤・土屋）



第 45 図 百舌鳥耳原中陵 円筒埴輪列復元案 (1/5,000)

註

(1) なお、当陵から出土した埴輪の報告としては以下の文献が代表的である。

徳田誠志・清喜裕二「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。

加藤一郎「大山古墳の円筒埴輪—甕窯焼成導入以後における百舌鳥古墳群の円筒埴輪—」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成17～19年度科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書、研究代表者：白石太一郎、奈良大学文学部文化財学科、2008年。

加藤一郎「付編 仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵における採集品について」『書陵部紀要』第65号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2014年。

徳田誠志・加藤一郎・土屋隆史・海邊博史「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵第1堤における遺構・遺物確認のための事前調査」『書陵部紀要』第71号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2020年。

(2) 中井正弘『仁徳天皇陵—この巨大な謎—』創元社、1992年。

(3) 註(1) 徳田・清喜2001に同じ。



1 根起き箇所1 (南西から)



2 根起き箇所1 円筒埴輪露出状況 (南西から)



3 根起き箇所1 円筒埴輪露出状況 (南東から)



4 根起き箇所1 原位置の円筒埴輪



5 根起き箇所2 [左]・3 [右] (南から)



6 根起き箇所3 (東から)



7 根起き箇所4 (南東から)



8 根起き箇所4 調査状況 (南西から)



1 根起き箇所5 (南から)



2 根起き箇所5 調査状況 (南東から)



3 根起き箇所6 (南から)



4 根起き箇所7 (南西から)



5 根起き箇所7 円筒埴輪露出状況 (南西から)



6 根起き箇所8 (南から)



7 根起き箇所2 [左]・3 [右] 調査後 (南から)



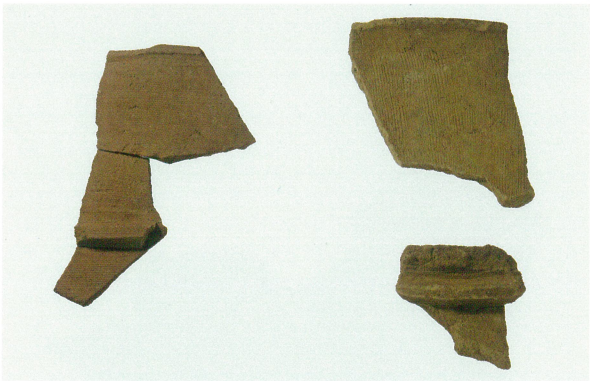
8 根起き箇所7 調査後 (南東から)



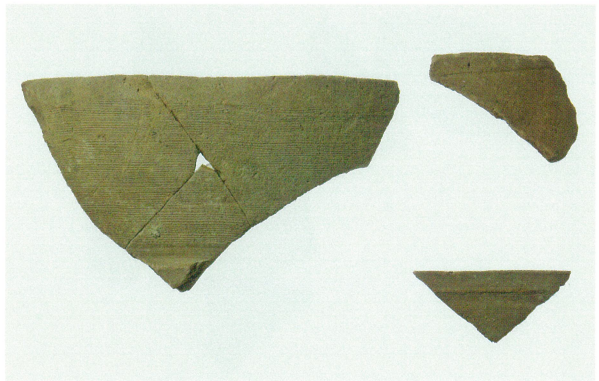
1 根起き箇所1 埴輪2



2 根起き箇所1 埴輪3



3 根起き箇所1 埴輪4～6



4 根起き箇所2 埴輪7, 8, 12



5 根起き箇所2 埴輪9



6 根起き箇所2 埴輪11



1 根起き箇所 2 埴輪 15



2 根起き箇所 2 埴輪 17 ~ 19



3 根起き箇所 3 埴輪 24



4 根起き箇所 3 埴輪 25



5 根起き箇所 3 埴輪 21



6 根起き箇所 3 埴輪 23



7 根起き箇所 3 埴輪 22



1 根起き箇所3 埴輪 28



2 根起き箇所3 埴輪 29 ~ 31



3 根起き箇所4 埴輪 32, 33



4 根起き箇所4 埴輪 35



5 根起き箇所4 埴輪 36



6 根起き箇所4 埴輪 37



6 根起き箇所4 埴輪 45



8 根起き箇所4 埴輪 46



1 根起き箇所5 埴輪 49 (胴部)



2 根起き箇所5 埴輪 49 (底部)



3 根起き箇所5 埴輪 50, 51



1 根起き箇所6 埴輪 54



2 根起き箇所6 埴輪 56



1 根起き箇所 7 埴輪 65



2 根起き箇所 7・8 磁器 70, 土師器 71